

# 「鹿鳴館時代」の女子教育について

秋 枝 蕭 子

## 〔序〕

我が国において社会的規模による女子教育が開始されたのは、明治維新以後、即ち明治五年の「学制」発布前後からのことであることは周知のことであるが、その進展は必ずしも順調なものではなく、幾つかの躍進期と衰微期を経て来ている。即ち、女子教育史上の高潮期として、次の五つの時期を指摘し得ると思う。

第一期 「学制」発布当時の数年間

第二期 「鹿鳴館時代」の数年間

第三期 日清戦争後の国民高揚期（特に明治三十年代）

第四期 「大正デモクラシー」期（特に第一次世界大戦前後の数年間）

第五期 第二次世界大戦後の教育大改革期

第一期は、云うまでもなく明治維新政府が文明開化の先進諸国に追付く為に、国民皆学を期して積極的に女子教育

をも奨励した頃であり、民間有志も政府に呼応して、女子の為の学校を開いた女学覚醒期である。しかしこの「上」からの女学開明策は、明治十年前後の保守反動期になると、忽ち萎縮沈滞してしまったことは、前に拙稿で述べた通りである。<sup>(註1)</sup>

第二期は、本稿で取り上げる時期であるが、明治十六年の鹿鳴館竣工期頃から、明治二十二年のその払下げ期に至る数年間、所謂「欧化主義」の風潮に乗って、西欧志向的女子教育——その中心はキリスト教系女学校——が百花燎爛と咲き出した時期である。同時に、これと表裏して、官公系女子教育に国家主義的な所謂「良妻賢母主義」教育理念が打ち込まれた時期でもあった。

第三期は、日清戦争の勝利により、我が国民間に“東洋の大国”意識が燃え上り、官公立系の国家主義的女子教育が全国的に拡張された時期である。同時に津田塾（明治三十三年）、日本女子大学校（同三十四年）等日本人の手に

よる女子の高等教育機関が出現した時期でもあった。

第四期は、所謂「大正デモクラシー」の高揚期を背景に、更に第一次世界大戦に参戦勝利して、「東洋の大国」から「世界の大国」意識に隆昇した時期であり、女子教育も一段と飛躍し、高等女学校数は男子中学校数を凌駕し、また東北帝国大学の女子への門戸解放（大正二年）、キリスト教的教養とアカデミズムを標榜した東京女子大学の創設（大正七年）、福岡県女子専門学校（大正十二年）を始めとした公立女子専門学校の設立等を見た時期である。

第五期は、云うまでもなく、第二次世界大戦後の教育大改革によつて、戦前の男女差別が撤廃され、大概の教育面が女子に門戸を解放した時期である。

以上五つの女子教育の高揚期は、それぞれ単純なものではなく、様々な矛盾や反動要素を含んでいるが、中でも、第二期の鹿鳴館時代の女子教育は、多くの矛盾や背反要素が互に錯綜して種々の問題をはらみ、その評価は当時とはとより、今日でも一様ではない。即ち「一部上流階級の女子の単なる西洋の猿真似に終り、女性の進歩向上のためにはあまり役立たなかつた」との厳しい見方もあれば、逆に、当時の女子教育、特にその代表たるキリスト教系女子教育を指して、「日本女子教育の先駆者、開拓者としての存在と、意義あるのみならず、これに勝つて、女子教育の原理、否女性観そのものについて革命的な意味を与えたもの」と

極めて高く評価する立場もあるのである。

この様な相反する評価が存在することを承知しながら、この時代の女子教育の実態を、背景社会との関連において探り、我が国の女子教育史上に、その正当な位地付けをしてみたいと思うのである。

## 〔一〕 背景社会の実態

明治十六年十一月、長年月と巨額の費用をかけて建設された外人接伴所「鹿鳴館」の開館式が、数百名の内外貴顕紳士淑女を集めて、華やかに挙行された。当時の新聞は「……館の正面には瓦斯火光を以て鹿鳴館の三大字を燃点し、燦然四辺を照らして白日の如し、真に是れ不夜の仙境なるべし……」と報じている。これが所謂「鹿鳴館時代」の幕開けであつた。当時の一般国情に比べれば甚だ奇異にも見えた華麗な欧化主義は、明治十九、二十年を頂点として、次第に衰微し、その衰勢に文字通り止めを刺すかの如く、明治二十二年二月十一日、国家主義色濃い「帝国憲法」発布のその日に、欧化主義の代表の如く世間から見られていた森有礼文部大臣は、壮士に刺殺され、同年六月頃には、欧化主義の象徴たる鹿鳴館は、一万坪の土地共に僅か九万円（註5）で第十五銀行に払下げられることになり、ここに「鹿鳴館時代」は終りを告げることになった。

この明治十六年から二十二年にかけての数年間の社会状

況は、実に複雑怪奇である。表では、条約改正を有利に導く為と称して、外務省を中心とした政府主脳部の音頭により、欧化主義政策が推進された。即ち、連夜の如く鹿鳴館に繰り広げられた舞踏会を始めとして、洋館、洋服、洋髪（束髪）、洋食、洋行の流行、<sup>(註7)</sup>また英語勉強や交際会、談話会、婦人会等の盛況など、その欧化主義の風靡ぶりは、当時の新聞雑誌を賑わし、一方において社会の開化進歩を促進したと共に、反面、行き過ぎや珍現象も出現し、<sup>(註8)</sup>心ある日本人ばかりでなく、外人達からさえ皮肉な批判を免れなかつた。<sup>(註9)</sup>

この様な一見華やかな欧化現象の裏では、時の政府はその中央集権―特にその薩長藩閥政権の強化を図る為、露骨なまでに自由民権運動の弾圧を押すすめ、或は新聞条例、集会条例、出版条例等を改正強化し（十五、十六、二十年）、<sup>(註10)</sup>或は保安条例（二十年）を發布するなどして、国民の政治批判の道を封じ、種々の口実を設けては、自由民権派の人々を逮捕投獄し、或は懐柔して、その崩壊を図つた。<sup>(註11)</sup>また、政府は、その財政確立を図る為、先に地租改正を行つて、地租を財政基盤としたが、これは年と共に富農・貧農の差を増大させ、さらに明治十年代中頃からのデフレ政策と相俟つて、鹿鳴館華やかな十八、九年頃は、全国的に農民の飢餓・不況や、下層士族や中小商工業者の破産・転落が目立つた。<sup>(註12)</sup>

しかもこれらの貧困者層の犠牲の上に、保護政策に基づく近代資本主義経済は着々と発達し、やがて明治二十年代の産業革命期を迎える態勢を整えていたのである。

この様に、明暗、表裏、進歩反動の矛盾に満ちた鹿鳴館時代の世相は、婦人の生態にも種々の影響を与えたのは当然である。この時代の婦人界については、幸に多くの資料が残存しているが、ここでは、当時の諸新聞の記事及び、<sup>(註13)</sup>婦人界・女学界の代表的雑誌「女学雑誌」（巖本善治編集責任）の記事から、<sup>(註14)</sup>特徴的な事項を年代順に拾つてみることにする。（但し、それらの記事中、直接女子教育に関するものは次章で改めて取り上げるのでここでは省略した。）

（明治十六年）

一月、○女教員演説会に祝文を朗読して拘引さる。（二十  
二日、絵入朝野新聞）、○医師及薬剤師を婦人にも免許  
か（二十二日、朝野）

三月、○仙台の成田梅女、女子自由党を組織（十四日、朝  
野）、○女子政談演説会開催（仙台）（十五日、郵便報知）  
十月、○京都八才の女兒大演説会（九日、朝野）○岸田俊  
子「箱入娘」の演説で入獄（十九日、朝野）

（明治十七年）

四月、福岡県会婦人傍聴人―当年嚆矢（十七日、福岡日日）  
六月、○「女学新誌」の創刊（十一日、東京日日）、○貴  
顕夫人総出で鹿鳴館の大バザー（十二日、郵便報知）、

○芸者も県会傍聴―山形県及び神戸（十五日、朝野）

十月、宮城県女子教育会設立（二十四日、朝野）

十一月、日本婦人の社会的進歩―外字紙の評（二十五日、時事）

（明治十八年）

二月、貴婦人令嬢の英語勉強盛（八日、東京横浜毎日）

三月、女電信技手の募集（十九日、今日新聞）

四月、○女子選挙権―宮城県で実行（但し二十五才以上の戸主のみ）（十八日、改進）、○窮迫士族転落―女房娘は売淫（十九日、日出新聞）

八月、貴夫人方毎月上野精養軒にて西洋料理会食研究（女学雑誌）

九月、○婦人の束髪―今や燎原の火（三日、朝野）、○

婦人乗馬会の計画（女学雑誌）

十月、千住の花魁―束髪―洋服―靴―握手（一日、郵便報知及び読売）

十一月、皇太后、皇后両宮、鹿鳴館へ行啓（二十日、東京日日）

十二月、大阪事件に紅一点―景山英女（十一日、改進）

（尚、この年の新聞に不況・饑餓記事及び上流社会の舞踏会記事が多い。）

（明治十九年）

一月、士族窮迫―福井県下士族妻女の醜業（三十一日、朝

野）

二月、福岡に婦人同伴会<sup>(註16)</sup>（三日、福岡日日）

三月、福岡婦人協会設立（十五日、時事）

四月、東京女子交際会設立―見聞を広むる為（二十七日、朝野）

五月、○陸奥宗光、和歌山にて男女同権を説く（十四日、福岡日日）、○福沢諭吉、時事新報に男女交際論を起す

（女学雑誌）

六月、甲府紡績工女、同盟罷工<sup>(註17)</sup>（女学雑誌）

八月、禁酒運動のレヴィット夫人各地で活動（十五日、東京日日）

九月、○佐々木豊寿子の婦人あみもの会発会（実用と啓蒙の会）（二十六日、毎日）、○末広重恭の「雪中梅」（四日、時事）

十月、○男女交際会、地方にも流行（一日、出羽新聞）、○高田早苗、男女同権策を論ず（女学雑誌）

十一月、○皇后宮はじめ女官等洋服用（女学雑誌）、○軍医夫人令嬢洋食会（二十八日、毎日）

十二月、○婦人矯風会設立（矢島かぢ子等）（十二日、朝野）、○婦人に関する学校及集会一覽<sup>(註18)</sup>（女学雑誌より転載）（二十六日、郵便報知）（尚この年、舞踏会記事頻々）

（明治二十年）

一月、○貴顕紳士による女子教育奨励会創立大評議（十四

日、東京日日)、○女子の制服に関する皇后宮の思召書  
(洋服奨励の思召)(十九日、朝野)、○帝国大学英语  
会第一回討論会題は「英米婦人が社会上有する特権を移  
して全く之を日本婦人に与ふるの利害」(女学雑誌)

二月、陸軍将校夫人儀式宴会に洋装の申合せ(十日、東京  
日日)

三月、大阪婦人界、乗馬流行(女学雑誌)

四月、○束髪・洋服はもとより婦人関係のもの大流行(十

三日、郵便報知)、○伊藤博文首相官邸の大假裝舞踏会(二

十二日、やまと新聞)、○京都の皇族・華族夫人、英国

式女礼を学ぶ(女学雑誌)

五月、「女学雑誌」大演説会の盛況(四日、東京日日)

八月、婦人矯風会、女子の自覚を叫ぶ(六日、朝野)

九月、婦人交際会、各地に流行(三日、郵便報知)

十一月、師範女生徒の建議により長崎県会、婦人傍聴の禁

を解く(女学雑誌)

(尚、この年も多くの舞踏会記事及び婦人関係集会設立記

事多い)

(明治二十一年)

四月、世間の思惑を怖れ、舞踏熱下火(二十五日、東京日

日)

五月、島田かし子、日本女性を米国大学に紹介し、大喝采

(三十日、東京日日)

六月、婦人の電信技手―局制上採用不可能(一日、朝野)

八月、洋服女は胃病、子宮病になるで日本服再登場(二十

三日、東京日日)

十一月、荻野きん、高橋みつの兩人、医術開業試験に合格

(七日、東京日日)

(明治二十二年)

二月、景山英女出獄(二十二日、朝野)

四月、巖本善治女学に関する謬見を論駁す(女学雑誌)

十月、大阪天満紡績工女三百名同盟罷工(九日、読売)

十二月、○群馬県会の廃娼大演説会(島田三郎等)(一日、

東京日日)、○婦人矯風会及白標倶楽部廃娼運動に起つ

―各地に流行(十一日、東京日日)

以上、この時代の婦人界の現象は新聞雑誌を賑わしたハ  
イライト的事件を眺めただけで如何に矛盾に満ちていたも  
のが明瞭であろう。即ち中・上流層の婦人達は、欧化主  
義の華やかな風潮の中に、解放感をほし<sup>(註21)</sup>ままにし、それ  
は屢々「奇異」であり、「調子に外れ」たものですらあつ  
たが、他方、下層階層の女性達は、欧化の蔭の不況に苦し  
み、身売りにまで追詰められたり、或は労働条件の苛酷さ  
に耐えかねて女工ストが続出したりしたのである。

また明治十年代半頃より全国的に起った自由民権運動  
と、政府側の弾圧の波は、婦人界にも直接、間接の影響を

与えた。一方に於て自由民権運動は、明治六年の解禁以来地道な宣教活動を続けて来たキリスト教の人道的運動と相俟つて、女性に人間的自覚を促し、精神的乃至知的開眼を、先覚女性達に齎した。キリスト教宣教師が多く居住した東京・横浜・京阪神地域に、多くのキリスト教系女学校が設立され、また婦人の集会（教育談話会、交際会、矯風会等）が多く起つて活発な啓蒙活動が展開したのも、当然であらう。また隣県福島で自由党弾圧の嵐が吹き荒んでいた十六年春に、仙台で勇敢にも女子自由党が結成され、女子政談演説会が開催されたり、各種の婦人会がこの地で設立されたのも偶然ではないであらう。仙台の地は、かつてキリスト教に好意的だった伊達藩の城下町であり、伝統的に進歩的地盤があつたと考えられるのである。他方、自由民権運動に対する弾圧の嵐は、前記の年表にも見られる如く、岸田俊子、景山英子等の女性民権論者をも入獄の憂目に遭せたのである。従つて、「鹿鳴館時代」は婦人界に限つても進歩、反動の明暗・矛盾に満ちた頗る奇妙な時期であつたのである。

## 〔二〕 欧化主義女子教育の展開

(1) キリスト教系女学校の隆盛

鹿鳴館時代の欧化主義政策が、中・上流婦人達に洋風文化への急激な接近を促したことは既に述べた通りだが、こ

の洋文化摂取の手近かな窓口と求められたのが、キリスト教系女学校であつた。このことは、明治初頭の文明開化熱の折にも見られた現象であつたが、鹿鳴館時代は、キリスト教側の態勢も、明治初頭とは比べものになく整備されており、また、小学校教育を終えて、さらに上級教育を求めていた女性数も相対的に増加していた。従つてかかる空気の中で、キリスト教系女学校が各地に続々と創設されたのは自然であつた。

次に、この鹿鳴館時代以前及びこの期間に設立されたキリスト教系女学校を列挙しよう。<sup>(註2)</sup>

(明治十六年以前に設立された女学校) (括弧内は創設年)  
フェリス女学校 (明三)、A六番女学校 (二三) (後に曲折を経て女子学院となる)

院と) 横浜共立学園 (四)、梅香崎女学校 (五) (後に曲折を経て下関の梅光女学院となる)  
B六番女学校 (六) (後に曲折を経て、青山女学院となる)

(七)、神戸女学院 (八)、平安女学院 (八)、駿台英和女学校 (八) (大正十二年に廃校)、サンズ女塾 (八) (後に捜真女学校に引きつがれた)

原女学校・新栄女学校・桜井女学校 (九) (後に合して女子立教女学校 (十)、梅花女学校 (十一)、活水女学校 (十二)、

プール学院 (十二)、同人社女学校 (十二) (翌年廃校)、成美学園 (十三)、神戸女子伝道学校 (十三) (後に聖和女学院になる)、高梁

順正女学校 (十三) (明治三十二年以降) (普通女学校になる) 山口英和女学校

(十四) (後に曲折を経て梅光女学院になる) 遺愛女学校 (十五)

(明治十六年) 新設なし

(明治十七年) 東洋英和女学校、大阪女学院 (旧ルミナ)

(明治十八年) 福岡女学院、北陸女学院 (金沢)、明治女

学校 (明治四十二年) 頌栄女学校 (後に普通女学校になる)

(明治十九年) 弘前女学院、宮城女学院、広島女学院、松

山東雲学園、捜真女学校、岡山山陽女学校 (明治三十一年以降普通女学校になる)

(明治二十年) 北星女学校 (札幌)、フレンド女学校、静

岡英和女学校、熊本女学校 (現大江) (高等学校) (明治二十六年に廃)

鳥取女学校 (明治三十二年) 大阪一致女学校 (後に廃)

(明治二十一年) 香蘭女学校、浪華女学校、共愛学園 (旧

前橋英和)、広陵女学校 (後に曲折を経て梅光女学院)、清流女学校 (名

古屋) (大正九年) 米沢英和女学校 (明治二十六年) 宇都宮

女学校 (後に廃) 高田女学校 (後に廃) 高知英和女学校 (明治三十

二年以降) 女子語学校 (現雙葉女学院)

(明治二十二年) 金城女学院 (名古屋)、山梨英和女学校、

女子学院、頌栄保母伝習所 (現頌栄) (短大) 小樽静修女学校 (後に

廃) 女子独立学校 (後の精華) 女子仏英学校 (現白百合女学校)

以上、鹿鳴館時代末期までに創設されていたキリスト教系女学校数は、この時代既に整理統合されたもの及び廃止されたものを除いても、優に五十校を越えていた。しかも東京、横浜辺の東洋英和、女子学院 (桜井女学校)、フェリス等の有名女学校には名流夫人令嬢を含む入学志願者が激増して収容しきれず、寄宿舎は満員、校舎の増築が相続いた。

これらのキリスト教系女学校数が、当時の女子教育界で如何なる比重を示すものか、次に官公立女学校数と比べてみよう。

(明治十六年以前に創設されたもの)

(官立) 東京女学校 (五) (明治十年) (官立) 開拓使女

学校 (五) (明治九年) 京都府立女学校 (五)、愛知県立

女黌 (九) (明治十二年女師附属と) 栃木県立宇都宮女学

校 (十二)、岐阜県立女学校 (十二) (明治十九年) 徳島県

立女学校 (十三) (明治二十四年) 山梨県立女学校 (十四)

(明治十九年) 群馬県立女学校 (十四) (明治十九年) (官立)

東京高等女学校 (十五) —— 結局、鹿鳴館時代開始頃の官公立女学校は官立一、公立六校である。

(明治十六年) 新設なし

(明治十七年) 山口県立女学校 (明治二十三年廃止)、鹿児島県立女学校 (明治二十年)

(明治十八年) 新設なし

(明治十九年) 大阪府立女学校 (明治二十二年より市立) (この年、群馬、

山梨、岐阜女学校それぞれ廃止)

(明治二十年) 高知県立女学校 (この年鹿児島女学校廃止)

(明治二十一年) 新設なし

(明治二十二年) 東京府立高等女学校、福井県立女学校

以上明治二十二年末に官公立女学校総数は九校である。

しかも、その後、二十三年に山口、二十四年に徳島女学校が廃校になっていて、二十四年新設された和歌山県立女学校を加えても、二十三年から日清戦争開始の二十七年迄、

官公立女学校は僅か八校 (官立一、公立七) に過ぎなかつた。<sup>(註24)</sup> 他の私立女学校については文部省年報も正確でなく、

実数を掴み難いが、この時期に東京・大阪その他の都市で若干設立されているが、女学校の名に価するのはごく少数で、多くは裁縫手芸等の私塾に過ぎなかつた。従つて、鹿鳴館期の女学校はその繁栄の大部分をキリスト教系女学校に負つていたことは明らかである。

では、この様に数に於て圧倒的に優勢であつたキリスト教系女学校の教育内容はどのようなものであつたらうか。

一般にキリスト教諸学校の教育の中心は宗教教育と語学

教育であるが、この時代のキリスト教系女学校が世人に魅力を感じさせたのは、その高度な英語教育であつた。<sup>(註25)</sup> 前に

拙稿でも述べたが、<sup>(註26)</sup> 当時の官公立女学校が、明治十五年の文部省通牒によつて、男子中学校の教科課程より英語、三

角、代数、経済を省き、裁縫や家事・女礼を増加させられたのに対し、キリスト教系女学校は、この通牒にとらわれる

ことなく、むしろ逆に英語教育を看板にし、さらに高等教育課程さえ志向していた。即ち、フェリス女学校は早

くも明治十五年高等科を設置して米国女子大学流の教育と評判されたし、<sup>(註27)</sup> 活水女学校も同年代長ラッセル女史によつ

て、国語系学科は日本の男子中学教程により、英語系学科は米国のセミナー課程で行うと報告されているし、同校は

明治二十二年高等科を設置して、米国の有名なマウント・ホリヨーク女子セミナーに極めて類似した教科課程を設け

た。<sup>(註28)</sup> この他、神戸女学院では明治十八年以来高等科を設け、年々之を充実させたが、同志社女学校でも二十一年に専門

科 (師範科、文学科、神学科) を設置、また東洋英和、女子学院 (各二十二年) 広島女学院 (二十三年)、福岡女学

院 (二十四、五年頃)、それら高等科を設置して、高等教育への高い抱負を實現していた。

この様な語学を中心とした高度な知的教育と並んで、キリスト教々育、特にその人間観が重要な意味を持つて教え

られたのは云うまでもない。殊に「女子は文明を生む母氏



なりとは西哲の確言なり」に始る弘前女学校設立趣意書(註29)にも伺える如く、未来社会の進歩に関わる母女子の意義を強調し、女子を教化することに大きな期待を寄せたのが、これらのキリスト教系女学校であつた。静岡英和女学校設立趣意書も同様な見解を示している。(註30)さらに同趣意書中には「男女ノ間、尊卑ノ差別ナク相互ニ平均ヲ失スルト莫ラシムルハ、家ヲ齊フル所以ノ始メ也」と、キリスト教的平等思想を主張していた。この様なキリスト教的人間観は、男尊女卑の空気がいまだに強かつた明治時代の女性に、新しい自覚と意欲を与えたことは、同校初代校長ミス・カニングラムがカナダ・ミッションへの明治二十一年の年次報告中で「この日本婦人たちが自己改善グループを作っている」と述べたことにも伺えるであろう。この様な女学生の自覚や意欲は、卒業後社会に貢献することを互に語り合つていたという女子学院卒業生の回顧談にも偲ばれるが、事実、これらのキリスト教系女学校に学んだ者の中から、多くの婦人教育者や社会改良家や女流文学者が輩出したことを忘れてはならない。(註34)

## (2) 非キリスト教系女学校の欧化主義

鹿鳴館時代の欧化主義風潮は、キリスト教系以外の女学校にも波及した。先ず官立女学の本拠たる東京師範学校女子部では、明治十八年洋服採用となり、又ダンスの稽古さえなされたが、(附属)東京高等女学校でも、二十一年十月、

西洋家事教場を設け、外人女教師を雇つて西洋家事を練習させた。(註35)同様、石川県女子師範でも、西洋料理、洋服裁縫、編物等、西洋家事が教授されたことが、同年の文部省年報に報じてあるばかりでなく、同年報「高等女学校」の項に「其ノ教科中英語ヲ置キ西洋裁縫ヲ加へ、外国教師ヲ聘シタルモノ亦多シ、殊ニ其ノ授業料ノ如キ……頗ル多額ヲ収ムルノ状況ナルニ、其ノ生徒ノ益々増進スルノ勢アルハ民情趨向ノ一斑ヲ推知スヘキナリ」と報告されているのは当時の一風潮を示すものと云えよう。尚、この年新設された高知県立女学校は、民権論者植木枝盛の建議によるものであつた。(註39)

この時代に創設された他の私立女学校も、それ／＼その教科に英語その他の洋風学科を用意し、欧化主義の面目を整えた。即ち、伊藤博文をはじめ当時の上流貴顕紳士婦人等により興された女子教育奨励会によつて二十一年創設された東京女学館は「日本婦人ヲシテ欧米ノ婦人ノ享有スル所ト同等ノ教育及ビ家庭ノ訓練ヲ受ケシムルヲ以テ目的トス」としているが、その寄宿舎規則も「館内ノ生活ハ英国中等以上ノ社会ノ風ニ則ルベシ」とされ、ケンブリッジ大学やロンドン大学卒業の英国婦人七名が教師として雇われたことが、東京都への設立願書に明らかにされている。(註42)その他、二十年設立の女範学校も「良家ノ婦女ニ英語及ヒ家政音楽等ヲ教授スル」ことを目的とし、英国女礼、洋裁、

編物の他、洋風家具食器類の扱い方まで教授することが学  
科課程に明記されていた。同年設立の女子経世学校は山岡  
鉄太郎の後見を得ていたが、教授内容は英学、漢学、数学、  
裁縫、編物、音楽、習字であり、ミシンや編物器械が用い  
られた。<sup>(註45)</sup>この様な傾向は仏教系の女学校をすら例外とせ  
ず、二十一年、島地黙雷夫人設立の女子文芸学舎<sup>(後の千  
代田女学校)</sup>にも原書での英学講義が含まれていた。<sup>(註46)</sup>  
(3)その他の女学興隆現象

既述の如く、この時代風潮は、従来、家庭内に沈棲して  
いた多くの婦人達を揺り動かし、或は婦人会へ、或は女学  
校へと進出することを誘ったが、その様な新鮮な空気は他  
にも幾つかの新しい動きを女性に促した。即ち荻野吟子を  
始めとする女医の出現や、女子職業学校の設立とその盛況  
に見られる新しい職業意欲、木村秀姉妹等の帝国大学入学  
請願に現われた向学意欲、また当時の女性啓蒙の高級女性  
誌「女学雑誌」の人氣に伺える女流の気概等である。これ  
らの現象について詳述の余裕がないので、ごく簡単な解説  
を試みるに止める。

女医出現については、<sup>(註20)</sup>にも記した如く、明治十  
八年三月、荻野吟子が医術開業試験後期に合格した時を以  
て始まるのであるが、彼女自身はその血涙の半生体験から、  
苦心惨胆之を得て後、明治女学校々医を勤める傍、「女学  
雑誌」にも執筆して女子の啓蒙に努めた。<sup>(註47)</sup>このことは、他

の女医志願者を刺戟して、二十年には高橋瑞子が苦闘の末  
に女医となり、また東京女子医大の創設者吉岡弥生も、「女  
学雑誌」に刺戟されて静岡の片田舎から上京し、二十二年  
に済生学舎に入学、女医への第一歩を踏み出した。従来女  
子の職業としては女教師か女工か賃縫しかなかった時代  
に、女医という新しい専門職が展開したのである。

明治十九年、京都の同志社及び東京の桜井女学校内に看  
護婦養成学校が出来たこと、また同年、東京に「女子に生  
活能力」<sup>(註48)</sup>を身につけさせる為に共立女子職業学校（共立女  
子大学の前身）が設立されたこと、同様、女子に独立心を  
養成させる為に女子独立学校が二十一年設立されたことな  
ど、いづれも婦人界に新風を与えるものであった。

次に女子の知的能力が男子より劣ると見なされていた明  
治時代に、帝国大学の門戸解放を求めた女性の意気は刮目  
してよいだろう。東京芝の医師木村井光の娘秀（十九才）及  
び久重（十六才）は、医学研究目的で、明治十八年来度々  
大学予備門入学試験の請願をなし、大学当局より拒否され  
るや、文部大臣へ直訴、更に旧制一高校長にも同様請願し、  
それぞれ却下されても屈せず、その間、妹久重は病死した  
が、さらに井上直女、香坂とら子、戸川小鹿共に請願を  
続け、遂に二十年一月、木村秀は帝国医科大学撰科生と  
して入学を許可されたのである。<sup>(註49)</sup>

最後にこの時代の女学伸長に大きな役割を果したものと

して「女学雑誌」にふれぬ訳にゆかないが、全巻五百二十六号に亘るこの雑誌に関しては、東京女子大学比較文化研究所で、青山教授を中心に十年来、極めて精緻な研究が続けられているし、ここでは紙数制限もあり、ただ輪廓を述べるだけにする。「女学雑誌」は周知の如く、女学に理解深い巖本善治を編集責任者とし（第二十四号以降で、それ以前は協作者）、十八年七月二十日の創刊号から、三十七年二月十五日の最終号まで、時期により月刊、或は旬刊、或は週刊で発行された婦人雑誌であるが、その前身「女学新誌」（十七年六月十五日号から十八年八月二十日号迄）が女学専用であったのに対して、その関心範囲を拡大し、女学関係記事以外の一般婦人界記事、政治社会評論、海外ニュース、読者投稿欄等巾広く載せ、当時のインテリ女性懂れの雑誌であった。巖本自身、毎号縦横に論陣をはったが、その基調は自ら中正と称する如く、欧化主義の行き過ぎや急進的女権論を批判しつつ、同時に旧来の無智で奴隸的な女性をも排して、女性の高等教育や社会改善運動を強く推進奨励し、以て女性啓蒙の役割を演じていた。既述の如く吉岡弥生の上京にも影響を与えたが、羽仁もと子もこの雑誌に啓発された一人であった。<sup>(註50)</sup>

### 〔三〕 欧化主義女子教育の衰微と

#### 国家主義女子教育の出現

鹿鳴館時代の欧化熱は二十年の首相官邸大仮装舞踏会あたりを頂点に、次第に世論のきびしい批判を受け出したが、女子教育の場合も同様であった。二十年七月、維新以来文明開化の旗手と目されていた福沢諭吉が、思いがけぬ痛烈な批判をキリスト教女子教育に向けたのである。即ち、「今日耶蘇教会女学校の教育法たる智育德育共に甚だ不完全にして……其教育法と日本婦人実際の生活と正しく相背馳して……」と述べ、西洋の語学、音楽、経典を学んでも日本婦人に必要な習字、作文、読書、和裁等をなし得ずとその知育を先ず責め、さらに德育についても、上流女子を貧賤の子女と同宿させる為、良家の子女が墮落しがちであるとして「……要するに温和良淑の美德を欠くの觀あるが如し」<sup>(註51)</sup>と非難した。西洋的教養を深く身につけ、明治初期には自らの娘達や姪をミッション・スクール（横浜共立学園）に入学させ、また「天は人の上に人をつくらず、人の下に人をつくらず」と大見えを切っていた福沢の言葉としては意外な感もあるが、反面、当時欧化主義の上げ潮に乗って浮き上り気味だったキリスト教系女子教育に対する、頂門の一針ともいべきものであった。

この頃から欧化主義的女子教育に対する種々の批判攻撃が公然と現われた。明治二十一年六月号の「教育時論」の社説「今日の女子教育」や、同年七月の「教育報知」の巻頭論文「日本婦人論」などは、いづれも西洋流女子教育

の国情に合致せぬことを非難し、日本の女子教育の必要を述べたものである。この様な非難、批判の続出に対し、二十二年、「女学雑誌」はその社説「何をか中正の旨義と云ふ、女子教育に関する幾多の謬見」で論駁(註53)しているが、西欧志向的女子教育の衰勢を止めることは出来なかつた。

明治二十二、三年頃から、キリスト教系女学校は軒並に入学志願者が激減し、かつて「生徒の腕車が校門に蝟集した」東洋英和も「荆の道を辿らねばならなかつた」(註54)と述べている。官公立女学校においても、二十二年官立東京高等女学校は英語時間数を減少し、教育、家事の時数を増加したし、東京女子高等師範では洋服を次第に廃してしまつた(註55)。

ここで官公系文教当局の対女学姿勢を顧みてみたい。既に前章で示した如く、欧化主義の高潮がキリスト教系女学校の創設に拍車をかけていた時、地方文教当局は女学に対し極めて冷淡であつた。鹿鳴館時代、若干の府県立女学校も新設されたが（山口、鹿児島、大阪、高知、東京、福井）、同時に同じ位、経費節減理由で簡単に廃止されてしまつた（群馬、岐阜、山梨（以上十九年）、鹿児島（二十年）、山口（二十三年）、徳島（二十四年））。さらに生き残つたものでも、京都府立女学校は二十年府会より経費負担を拒否され、本願寺の寄付に頼つたし、(註57)二十二年創設の東京府立高等女学校も、同じ年府会により翌年度経費が否決され、授業料と西本願寺その他からの寄付でようやく命脈を保つたのである。(註58)

この様な地方文教当局の女学への冷淡さは小学校女兒就学率にも反映している。即ち、鹿鳴館時代開始の十六年に33.64%であつた女兒就学率は、年々低下し、欧化主義の頂点といわれた二十年には28.26%まで下つてしまつた(註59)。つまり、政府当局は、上流階層の欧化教育を十八年創設の華族女学校及びキリスト教系女学校にゆだねるのみで、中・下層女子の教育には興味がなかつたのである。

ところが、既述の如く、欧化主義の一部の行き過ぎは、二十年頃から批判反動の空気を招くと共に、儒教的忠君愛国思想の復興、さらに背景社会の微妙な国際・国内関係、また進展しつつあつた資本主義機構等々からみ合つて、「富国強兵」思想に基づく国家主義教育理念が出て来たのである。この教育理念は、次代の「強兵」を生み育てるべき女子の役割、意味を重視したのは当然であつた。即ち時の文部大臣森有礼は、上流階層子女に西欧的教養を奨励しながら、他方一般女子には「軍国の母」の自覚を植え付けることを教育の本旨と考へたのである。明治二十年、中国地方巡視に際して彼が行つた説示は有名であるが、右の思想を如実に示すものである。即ち「国家富強の根本は教育に在り。教育の根本は女子教育に在り。女子教育の挙否は国家の安危に關係するを忘るべからず。女子を教育するには国家を思ふの精神をも養成すること極めて緊要なりとす。今国家の為に要する女子教育の精神を言頭はさんか為に想

像の例を挙げんに、母か孩児を養育する図、子を教ふる図、丁年に達して軍隊に入るの前母に別れる図、国難に際して勇戦する図、戦死の報告母に達する図等の額面七八枚を教場に掲ぐることは是なり。女子教育の精神は此度に達せしめざるへからず<sup>(註60)</sup>と述べ、さらにこの前文として「今夫れ女子教育の主眼とする所を要言せば、人の良妻となり人の賢母となり一家を整理し子弟を薰陶するに足るの気質才能を養成するの<sup>(註61)</sup>に在り」と示された。ここから「良妻賢母」の語が引き出され、それが右の国家主義思想と結合して、国家主義的な所謂「良妻賢母主義」<sup>(註62)</sup>女子教育観が成立し、以後の官公立系女学校のモットーとなり、大正、昭和時代に引継がれ、戦前まで、我が国の官公立系女子教育の中核思想となつたのである。

### 〔結〕

以上、限られた紙数の中で、鹿鳴館時代の女子教育の実態を、その背景社会との関連において考察して来た。この一見華やかで且つ矛盾に満ちた時代の、同様絢爛として且つ異質の観を抱かせる女子教育を、女子教育史上どのように位地付けたらよいであろうか。序に述べた如く、之をただ上流階層子女による西洋の猿真似にすぎず、女性の進歩向上には無縁であつたと見ることも、あながち的をはずれたものとは云えない。確かに、この時代の女子教育を支配

したのはキリスト教系女学校であり、その教育内容は当時の一般社会とは遠い西欧的教養であつたし、高い授業料を投じて之を受けられたのは主として中・上流富裕階層の娘達であつたからである。また一般庶民の娘達の小学校就学率が、この時代却つて低下したのも、この様な考え方を強める材料とならう。

然し乍ら、本論で述べた如く、この時代の女子教育が、たとえ現実遊離のきらいはあつても、女子に人間的平等の自覚を与え、且つ女々母は次代文明を生み出す母胎であること強く教えた意義と、一般社会がまだ女子教育を低く見下していた時、早くも高等教育への志向を實現化する努力がなされていたこと、さらに、この時代、キリスト教的平等の人間観と、高い知性とを教え込まれた女子学生の中から、次代の代表的女子教育家や社会改良運動家や女流文学者達が多く生まれたことなどにより、この時代の女子教育、特にこれを代表するキリスト教系女子教育を高く評価してよいと私は考えるのである。蓋し教育の真価は、それが現実に行われている時点によつてのみ評価されるのである。むしろそれが影響を及ぼす次代の時点によつてこそ正しく評価されるべきだと思ふからである。

しかし同時に私は、この時代の女子教育を無条件に讃えはしない。何故なら、当時の女子教育が主として上流階層に奉仕して一般庶民の子女とは次第に遊離してしまつたこ

とは、人類の平等を主張し、弱く貧しい人々の味方であるべきキリスト教本来の精神とも背反するし、そのあまりに強い西欧依存性は、この時代の女子教育の根の浅さ、ひ弱さ及び限界を改めて痛感させるからである。それ故に、一たび、風向きが変ると、忽ち反動の衰微期が急激にやって来たのである。

次に、この時代に、戦前の公的女子教育を規定した国家主義的な「良妻賢母主義」女子教育観の種子が蒔かれたことも重大である。即ち、この鹿鳴館時代を期に、はつきりと戦前の女子教育思想の二流、即ち、富国強兵を求める国家主義的女子教育観と、普遍的人間観に立つキリスト教的女子教育観が根付いたという点である。

しかも、この一見相反し相矛盾し合う両教育理念は、巨視的に之を眺める時、いづれも、我が国の近代化過程におけるブルジョアジイ的教育理念につながるものであったことを知るのである。この意味においても、鹿鳴館時代の女子教育は種々の側面を有しながら、我が国女子教育史上、甚だ重要な位置を占めると私は考えるのである。

### あとがき

尚、この時代の女子教育に関しては、幸に極めて多くの資料が存在しているが、紙数の制限でそれらを存分活用出来なかつたのは残念であった。他日を期したいと思う。

(註1) 「学制時代に於ける女子教育の出発について」(「文芸と思想」第13号) 及び「教育令及び改正教育令発布前後の女子教育」(「文芸と思想」第19号) 参照

(註2) 唐沢富太郎「日本の女子学生」70頁。同様な見解は他にも、深谷昌志「良妻賢母主義の教育」104頁や、土屋忠雄「女子教育の歴史」(教育文化史大系V) 137頁にも見られる。

(註3) 基督教学校教育同盟編「日本におけるキリスト教学校教育の現状」(歴史篇) 68頁。

(註4) 郵便報知十六年十一月三十日記事―(「新聞集成明治編年史」第五卷 388頁)

(註5) 東京日日新聞二十二年六月二十七日、記事―(前掲書第七卷 285―286頁) 尚、翌二十三年七月頃、鹿鳴館の建物は第十五銀行より、華族会館として貸与された。

(註6) 洋館については、官庁や銀行、ホテル、皇族邸等のみでなく、花柳界まで洋館に改造するのが流行した。洋服、洋髪については都会地ばかりでなく、東北・四国・九州の田舎にまで拡がり、殊に女学生間に流行したと新聞雑誌は報じている。筆者の伯母(明治十年生)も十才位の頃、父親(西洋医)の大坂土産の帽子や洋服を着て歩き、土地(福岡県遠賀郡)の人々から羨まれたと語っている。洋食も上流階層の間から流行し、二十年頃には「西洋料理人払底―銀座は洋食街化」と時事新聞は報じている(二十年八月二十九日附)。洋行熱も盛んで、為に「洋行会社」設立計画さえ新聞記事となった。(二十年四月六日附金城だより)

(註7) 英語熱は上流階層の間では既に十五年頃から始まり、女官達が英語学習をしていたが(十五年三月二十四日、東京日日)、十八年頃は上流婦人等が桜井女学校、東洋英和その他のキリス

ト教系女学校で英語を学ぶことが盛んで、入学制限をするほどであった。婦人会、婦人談話会等の婦人の集会も十九、二十年頃各地に続出した。

(註8) 舞踏会の作法も知らず、ひたすら飲食したりして外国人の嘲笑を受け(十九年二月廿八日、郵便報知)、社会改良策として男女学生の舞踏奨励を提案したり(同年十月廿九日、朝野)、また新聞に求婚広告をして、英語と乗馬の出来る娘を求めた官吏があつた。(二十年一月十日、時事)

(註9) 「……日本全体の有様を見るに此の舞踏と甚だ不釣合の事多し、日本人は今少し勉強して、斯る不釣合なきに至らざれば、歐洲の仲間入りは寛東なかるべし……」との英人の批評の投書があつた。(十八年七月十二日、郵便報知)。また明治二十二年頃、駐日英国公使フレイザー夫人も故郷への手紙の中で、条約改正問題にふれて、日本はまだ西欧並みに文明開化されていないと書く。Mrs. Hugh Fraser "A Diplomatist's Wife in Japan" p. 41

(註10) 例えば新聞条例の強化により十五年度一ヶ年間だけで新聞の発禁停止八十件と十六年一月六日の郵便報知は報じている。また集会条例により演説会の聴衆名簿を提出させたり、東京帝大学生に対しても政談演説傍聴禁止及び学術演説傍聴許可制の違が出された。(十八年一月九日、朝野)さらに二十年十二月二十五日、保安条例の発布と同時に民権派の危険人物と目されていた者三百余名を皇城三里外に追放処分にした。この中には後日、憲政の神様とも称された尾崎行雄や第一回帝國議会議院議長に選ばれた中島信行、クリスチャンの片岡健吉等まで含まれていた。

(註11) 明治十五年頃から自由民権派の人々の強圧はひどく、特

に同年末の福島事件や翌年の加波山事件、秩父事件等は有名である。鹿鳴館舞踏会華やかな頃、その派手な仮装で名をあげた警視總監三島通庸は、民権派強圧の急先鋒であり、福島事件の際は鬼臈令と称されて棘腕をふるつたのである。また、政府は自由党総裁の板垣退助に多額の洋行費を与えて外遊させ、また帰国後は授爵してこれを懐柔した。

(註12) 十八年頃、各地で借金党が増し、農民の暴動が起つた。五月十五日の朝野新聞は「全国的の飢饉、酸鼻の極、草根木皮をかじり、死馬の肉を食ふ」と書き、十八年、十九年の新聞は窮迫士族の転落として妻娘が売春をなすと報じている。十八年七月一日の山陰新聞は不景気叙え歌として「日々にいやます不景気は、売れず買はずのにらみあい……。富者はメ込み貧は飢へ、苦業の界は壁一重……。無性に殖るは獄ばかり、詐偽漢、盗賊、密売淫……。東西南北苦情のみ、聞くもうるさき梅雨の空……。」と紹介している。

(註13) 「新聞集成明治編年史」五、六、七巻に集録されてある記事及び福岡日日新聞(西日本新聞前身)の当時の記事から採用した。

(註14) 「女学雑誌」第四一六号及び第四一七号に「盗見うつし」と題して明治十八年と二十年の婦人界中主な出来事を記載したものから、当時の新聞記事と重複しないものを拾った。

(註15) 「女学雑誌」の前身

(註16) この福岡で起つた婦人同伴会は、その後、東京、横浜等に伝わり、同様な会が出来たと五月二十六日附福岡日日新聞紙が報じている。

(註17) 兩宮製糸工場に起り、我が国最初の女工ストといわれ、勤務条件の改悪(時間の延長と賃下げ)に対して百余名の女工

がストを断行、結果は女工側の勝利となった。これは、甲府市内の他の紡績工場にも波及した。

(註18) 「女学雑誌」記事として、十九年中に新設された普通女学校数六、看護学校等職業女学校四、婦人会(交際会、談話会、矯風会等)二十二が記載されている。

(註19) 島田かし子はフェリス女学校高等科第一回卒業生(明治十五年)で、後に巖本善治夫人となった。筆名「若松賤子」、「少公子」の訳者としても有名。この英文で書かれた日本女性の紹介記事は「女学雑誌」第九十八号(二十一年二月二十五日刊)に附録として掲載されたが、本文は米国ヴァッサー大学からの求めによって書かれたものである。尚、「女学雑誌」第百三号(同年三月三十一日刊)に、右英文がヴァッサー大学の集会で読まれ、非常な喝采を博したこと、及び集会者中、かし子につき詳細を知りたい希望者が続出したとの右大学書記ロスト嬢の手紙を掲載している。

(註20) この記事は何かの思い違いで、我が国女医第一号の荻野吟子は、明治十七年、医術開業試験を女子に許可することになって、直ちに同年前期試験に合格、翌十八年春後期試験にも合格して開業免許を得ている。高橋瑞子は、女子として済生学舎の最初の入学者で、二十年に医術開業試験に合格している。

(註21) (註14)に記した「女学雑誌」第四一六号の「姿見うつし」の前文に、巖本善治は「明治十七年、十八年という新女学勃興日の出満潮という比喩ほひの、今は奇異なる記憶を列ね記るし、其如何に熾んにして、而も亦た如何に調子に外れ居りしやを示し：：」と書いている。(傍点、筆者)

(註22) ここに掲げたキリスト教系女学校設立年表は、各女学校の沿革史類、基督教学校教育同盟編の「キリスト教学校教育の

現状」(歴史篇)、「女学雑誌」等を広く当って作製したものである。

(註23) 例えばフェリス女学校では十八、十九年頃入学者が激増し、寮は八畳に六人、六畳に五人位詰込まれ、校長は渡米募金して校舎増築した(「フェリス和英女学校六十年史」90頁)。また東洋英和では十七年創設当時僅か二名の生徒数が、年内に六十名近くなり、翌十八年は定員百七十名、十九年には二百五十名になり校舎を次々に増築した(「東洋英和女学院七十年誌」7〜8頁)。桜井女学校も「東天に登る朝日の如き勢」で、寄宿舍の各室は満員だったと当時の学生が回顧している。(「女子学院五十年史及学窓回想録」108頁)。またこれらの女学校には岩倉、伊藤、西郷、陸奥等の令嬢達や木戸夫人、後藤夫人(以上東洋英和)、二条公夫人、徳大寺公夫人等の華族婦人(以上フェリス)が入学していた。

(註24) 官公立女学校については、文部省年報の各年度のものを参照した。

(註25) 「東洋英和に二十一年入学した野村美智子は「：：英和は他の女学校に比べて、語学の力がすぐれて居たことと環境が宜しかった為、かなり有名な方の令嬢方が居られました」と回想している(同校七十年誌128頁)。また明治廿四年フェリス女学校高等科を卒業した佐藤哲子は、十七年頃、京都女子師範に在学中だったが「之からは英語位知らなくてはという熱望抑へ難く、遂に同校を退学して、フェリス女学校の名声に憧がれ」て横浜まで来たと記している。(同校六十年史61頁)

(註26) 「キリスト教系女子教育研究のしおり」(「文芸と思想」第25号)61〜63頁参照

(註27) 「フェリス和英女学校六十年史」50頁



- (註28) 「活水五十年史」24頁、28頁及び、拙稿(註26)参照
- (註29) 「弘前女学校歴史」9～10頁
- (註30)、(註31) 「静岡英和女学院創立六十五周年史」2頁、及び「静岡女学校創立前史」19頁
- (註32) 「静岡英和女学院史料」上、3頁
- (註33) 浅田みか子は明治十九年頃の思い出として「：：：当時の女学生は、そういう言葉(良妻賢母)を口にするのは恥じたものです。私は将来独立して女学校を建てるとか、或は学者になるとかいうことはいいましたが、お嫁に行くなどということには触れなかつたものです」とその当時の気概を語っている。「女子学院五十年史及学窓回想録」88頁)
- (註34) この当時或は直後のキリスト教女学校生の中から、婦人教育者としては羽仁もと子(明治女学校出身)、河合道子(北星)、大江スミ(東洋英和)、三谷民子(女子学院)など、社会改良者としては矯風会の久布白落実、ガントレット恒子(共に女子学院)、安部磯雄夫人(梅花)、文学者としては、島田かし子(若松賤子)(フェリス)三宅花圃、大塚楠緒、(いづれも明治女学校)、山川とみ(梅花)などが出た。
- (註35) 「東京女子高等師範学校六十年史」56頁
- (註36) 「文部省第十五年報」(二十年)11頁及59頁
- (註37) 前掲書 86頁
- (註38) 前掲書 59頁
- (註39) 深谷昌志「良妻賢母主義の教育」106頁、外崎光広「明治前期婦人解放論史」245頁
- (註40) 東京都史紀要九「東京の女子教育」113頁
- (註41) 前掲書 115頁
- (註42) 前掲書 118～120頁
- (註43) (註44) 前掲書 188頁
- (註45) 前掲書 190頁
- (註46) 前掲書 178～179頁
- (註47) 荻野吟子は、若くして結婚、夫から性病を伝染されて入院中離婚された。この非道と、入院中男性医師の手にかかった屈辱感から女医の必要を痛感し、女子師範に学んだ後、懇請して男子用私立医学校の好寿院で苦学し、十五年卒業後、政府に熱心に請願を続け、遂に十七年開業医の受験資格を女子にも認めさせ、同年秋に前期試験を、翌年春後期試験をパスしたのである。「吉岡弥生伝」124～145頁)
- (註48) 創立者宮川保全はその設立目的について「：：：世は日進月歩の勢で進み、生存競争は日一日と激甚になるのに女子に生活能力がないとは何と気の毒ではないか：：：」と述べている。「共立女子学園七十年史」24～25頁)
- (註49) 「女学雑誌」28、29、37、42号及び二十年一月十一日附毎日新聞
- (註50) 羽仁もと子著作集第十四卷(半生を語る)50頁
- (註51) 「耶蘇教会女学校の教育法」(時事新報)二十年七月二十九日号——福沢諭吉全集第十一卷 318～320頁
- (註52) 前掲書、320～323頁(但し(時事新報)七月三十日号)
- (註53) この社説で巖本善治は当時女子教育に向けられた一般的謬見を知力、体力、任務などの各点から分析し、それぞれ女子教育不要の謬見を批判し、将来賢妻良母たるべき女子の高等教育の必要を説いた。「女学雑誌」第157号)
- (註54) 「東洋英和女学院七十年誌」13頁
- (註55) 「文部省第十七年報」(二十二年)54頁
- (註56) 「東京女子高等師範学校六十年史」64頁

(註57) 深谷昌志「良妻賢母主義の教育」二二頁

(註58) 「東京府立第一高等女学校創立第四十周年記念」誌9頁  
及び89～90頁「東京の女子教育」(東京都史紀要九)105頁

(註59) 文部省年報各年調べ

(註60) 木村匡編「森先生伝」198頁

(註61) 前掲書197～198頁

(註62) 「良妻賢母」の語は森有礼の創作と伝えられるが、厳密にはそうは云えない。少くともこれに類した言葉は明治以後屢々用いられた。キリスト教系女学校でも之を用いたことは拙稿「キリスト教系女子教育研究のしおり」中でも指摘した通りである。従って、「良妻賢母」の言葉は、元来は文字通り「よき妻、かしい母」を意味し文明開化的積極性を有していた。之が国家主義的な意味で用いられるようになったのは、森有礼の使用以来であるが、しかし私は、森有礼にしても、後世の「良妻賢母主義」が意味したような儒教的保守的な意味で用いたとは思わない。彼に於ける国家主義は西欧的国家主義即ちブルジョアジの富国強兵観であって、後の儒教的乃至神道的国粹主義につながる国家主義ではなかったと思うのである。従って、彼の場合、少くとも主観的には、欧化主義も、国家主義も矛盾せずに共存していたのではないかと考えるのである。